

第48回 日本ジオパーク委員会議事録

日時：2023年5月20日(土) 10:00～14:45

場所：幕張メッセ国際会議場2階 202会議室 (JGC 会議)

幕張メッセ国際会議場2階 201会議室 (新規認定申請地域公開プレゼンテーション)

幕張メッセ国際会議場2階 201会議室 (公開情報共有)

<委員長>

中田 節也 東京大学名誉教授 防災科学技術研究所火山研究推進センター 参事

<副委員長>

宮原 育子 宮城大学・宮城学院女子大学名誉教授 宮城学院女子大学現代ビジネス学部 教授

<委員>五十音順

ヴォウォシェン・ヤゴダ 一般社団法人 隠岐ジオパーク推進機構 事務局員

大野 希一 一般社団法人 鳥海山・飛島ジオパーク推進協議会 事務局次長兼主任研究員

久保 純子 早稲田大学 教育学部 教授

柴尾 智子 元公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

下田 一太 筑波大学 人間総合科学学術院 准教授

菅原 久誠 群馬県立自然史博物館 地学研究係 主幹

田中 裕一郎 産業技術総合研究所 地質調査総合センター シニアマネージャ・招聘研究員

新名 阿津子 高知大学 教育研究部人文社会科学系 人文社会科学部門 講師

欠 橋詰 潤 新潟県立歴史博物館 学芸課 専門研究員

長谷川 修一 香川大学特任教授 四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構 副機構長

長谷川 卓 金沢大学 理工研究域地球社会基盤学系 教授

欠 山口 勝 横浜国立大学総合学術高等研究院 客員教授 日本放送協会横浜放送局 チーフアナウンサー

欠 渡辺 綱男 一般社団法人 自然環境研究センター 上級研究員

渡辺 真人 産業技術総合研究所 地質情報基盤センター 地質標本館室 シニアスタッフ

<日本ユネスコ国内委員会>

鶴岡 泰二郎 文部科学省国際統括官付 ユネスコ第三係長

<関係省庁(オブザーバー)> 建制順

柴田 伊廣 文化庁 文化財第二課 文化調査官

判田 乾一 国土交通省 水管理・国土保全局砂防部砂防計画課地震・火山砂防室 室長

萩原 和子 環境省 自然環境局 国立公園課 国立公園利用推進室 エコツーリズム推進専門官
ジオパーク担当

<事務局>

古澤 加奈 JGN 事務局長

田上 順一 JGN 事務局次長

山崎 由貴子 JGN 事務局員

関村 絢 JGN 事務局員

新田 竜之介 JGN 事務局員

【① 挨拶・報告事項】

委員長：みなさん、おはようございます。本日もよろしく願います。

まず、この30分間で現地調査員の確認やプレゼンテーションの質問確認があるので早めにやりたいと思う。

報告事項だが、昨年12月のユネスコ世界ジオパーク・カウンシルの会議の後、審査結果の報告書の取り纏めをやってきた。その報告が先週公開されたが、先週から始まっているユネスコ執行委員会の中で公開された。新規認定地域については、5月24日に正式に承認を受ける形になっている。そこで白山手取川ジオパークが日本で10番目のユネスコ世界ジオパークに認定登録されることになっている。

その他、3月11日に隠岐ユネスコ世界ジオパークで「国際海洋ゴミシンポジウム」を開催した。外国から何人かオンラインで参加していただいて、無事に終えることができた。この前日に白山手取川ジオパークの会長がお亡くなりになった。

4月27日、28日にユネスコ世界ジオパークの審査員の研修会が行われた。日本からは8人が出席をした。これは2日間に渡り、21時から24時までであった。その中でポイントになったことを今日の公開情報共有で紹介するが、エリアの問題や人口密度、ユネスコのロゴの使い方の注意等が色々と指摘された。

以上が私からの報告だが、事務局側のほうで何かあるか。

事務局：前回の第47回JGCの議事録の確認が遅くなってしまい申し訳ない。昨日、皆様にお送りしているので、確認いただいて30日までに戻していただければと思う。その中にも記載はあるが、前回決定事項として、申請書のE-10は今年からなくすということが決定していたが、この周知ができていなかったのも、今回の蔵王の申請書にE-10がそのまま残ってしまった。申し訳なかった。今回、現地調査に行かれた際には様式からはずしておくので、E-10はこの後からはなくすということで徹底したいと思う。

また、今年ユネスコからの審査員を受け入れる再認定予定の3地域、洞爺湖有珠山、室戸、アポイ岳では、それぞれ7月4日から8日にアポイ岳、7月8日から12日に洞爺湖有珠山と、同じ審査員2名が連続して回る。室戸は7月13日から17日の予定。日本ジオパークからの同行者の調整をさせていただいているところだが、まだ世界の審査に行ったことのない方のオブザーバー参加を募りたいと思うので、メール等で連絡をする。よろしく願います。

委員長：日本の審査員は、中国のジオパークをダブル、トリプルで審査することになっており、VISAを取得するのに大変な状況である。

以上が報告になるが、何か質問やコメント等はあるか。

一同：(コメント等なし)

委員長：なければ現地調査員の確認に移る。

【② 現地調査員の確認】

委員長：ユネスコ世界ジオパーク審査事前確認は、山陰海岸で委員3名、新規で本日プレゼンする蔵王は、私と委員1名と調査員1名と資料に書いてある通り。これに異論等があれば申し出ていただきたい。

一同：(異論等なし)

委員長：特に問題なければ了承したいと思う。担当の方はよろしく願います。

事務局：この調査員の情報を各地域も待っているのでも、午後の公開情報共有のセッションの冒頭で発表させていただいてもよろしいか。

委員長：問題ない。本日の夕方から日程等の調整が始まるということでもよろしいか。

事務局：はい。

【③ プレゼンテーションでの質問者等確認】

委員長：3 番目の議題は、蔵王ジオパーク構想の本日のプレゼンテーションについての質問者とその質問の内容の確認をしたい。これまでの通り、プレゼンについては新規地域に審査に行く人が中心となって質問する形になっている。皆さんも申請書をざっと読んだと思うが、どういう事が今、質問として考えられるか簡単に紹介したいと思う。さらに皆さんのほうから「この点は確かめたほうがよいのではないか」等のコメントがあればお聞きしたいと思う。

まず、全体構想としては、少し防災に偏っているというところは強く感じている。文化・歴史・観光資源は結構あるはずだが、それについてあまり触れていない。ところが、蔵王町のホームページ等のリンク先を見ると、それらについてはブランド化されたものがすでにあって、かなりストーリーもできている。そういう中にジオパークがどう取り込んでいくのか、その辺の視点が少し抜けていると感じているので質問したいと思う。

それからエリアの問題については、当初3市3町で始めたが、結局蔵王町1町での申請に変遷してきている。そのためエリアは1町だが、一部隣町の部分、2つの町の部分が入り込んでいる。これについては少し説明を要求しようかと思っている。

あとは、将来的に3市3町を取り込む形で展開するのかということも含めて質問したいと思っている。

委員：申請書を読ませていただいて、冒頭に「3つの火山との共生」と大々的に書かれているが、ご存知のように蔵王はお釜や樹氷、高山植物などが非常に国内外に有名。一方、それにも関わらず蔵王山のこと大黒天のことは書かれているが、もう少しストーリーと絡ませて現在に至るまでと、最近では活火山の防災のこともあるのでその辺の取り組みが少し弱いというところと、青麻山、白石カルデラについて非常に記述が少なく、「3つとの共生」というのであれば、地質学的にどういう特色があるのか等、そこをどういう風にもっていきたいのかというのが明確でない。ジオストーリーとしての展開が少し弱いのではないかとと思っている。そういった「3つとの共生」をするのであれば、観光では知られているとは思いますが、ジオパークとしてどういった打ち出し方をしていこうかと思っているのかというのを聞きたい。

もう一つ、近隣に例えば磐梯山や栗駒山麓など似たようなジオパークがあり、非常に近い所にあるので、そういった所との差別化や、この蔵王ジオパーク構想はどのような特色をだしていくのかというのを、お釜の所はいいとして、もうちょっとエリアとしての展開を考えていただきたい。

それから地形的なところを言うと、湧水は至る所から出ていると思うが、とあるサイトでは湧水のマップを出したり、暮らしとの関係だったり等申請書にも書かれているが、もう少し具体的に地形的な特色を活かしたらよいか詰めて展開されていたらいいのかなど。そう言ったところを中心に聞きたい。

他にも聞きたいことはいっぱいあるが、時間の関係でこれくらいにしたいと思っている。

委員長：文化遺産については書き込めていなくて、蔵王は特に色んな食文化が目立つ所で、フルーツ等がどうしてここで栽培されるのか書いてほしい。牧場チーズがあるのはすごいと思うが、そういう開拓地と扇状地との関係等、その辺の歴史を語っていただきたいと思う。

それから、遠刈田温泉ができたというのは蔵王古道の御山詣りと関係しているはずだが、その辺が上手くストーリーが説明されていないと思う。

蔵王には伝統こけしがあると思うが、こけしについても触れていないというのは少し残念。その文化ができた理由等、歴史的な文化的背景を含めた説明が必要。

教育については、蔵王高校を中心に非常に活発にジオパーク的活動がある。ただ、ジオパークとしての主体的なプログラムになっているのかというのをお聞きしたい。

ツーリズムに関しては、もうすでに蔵王ブランドがある中に「ジオ」をのっけるわけだが、特に複数ある

ガイド団体とどう連携しているのかというのが気になるところ。その一方でガイド研修をやっているのに、既存のガイド団体と混乱を生まないような連携をどう考えているのかどうか聞く必要があると思っている。

管理運営については、協議会が3月にできたばかりでジオパーク＝町になっている。その辺をどう協議会が一体となってパートナー等との協定や体制作りをしていくか。そこがまだ見えていないのが不安材料ではある。

蔵王マイスターというのがあるが、これがどういったものか分からないので、これをジオパークの中にどう生かしていこうとしているのかがよく分からない。

SDGsについては、防災に取り組んでいるのでやっているとは思いますが、それ以外のことはどう展開していこうとしているのかについて聞きたいと思っている。

以上だが、羅列的にたくさん言ってしまったのでフォローできないかと思うが、皆さんが申請書を読んでお気づきになった箇所等、ご指摘いただければと思う。もちろん良いところもどんどん言ってもらっても構わない。

事務局：本日、利害関係で副委員長がコメントできない。

委員長：副委員長は、蔵王の推進アドバイザーなので利害関係がある。議論には加わらないことになっている。

発言はなさない。

委員長：その他あるか。

事務局：保全とオーバーツーリズムの事をどう考えられているのかというのは気になる。蔵王は準会員になってからも10年経っていて、なぜここまで時間がかかってしまったかということ、山形側と一緒にやりたいと働きかけていたが、それが中々うまく進まず、最終的には1町から始めようということで今回の申請になったという経緯がある。ここ10年の中では去年からかなり職員も増やして、しっかりと申請してジオパークとしてやって行こうということになった。今までの10年と比較すると、今が1番勢いがあるかと思う。

委員長：その他、気付いたところや、蔵王に行ったことがある方で気になるところがあればお願いしたい。

委員：蔵王高校の取り組みが非常に活発で、旅行会社と連携してジオパークのツアーの商品化をしたが、それは火山砂防フォーラムに向けて来た人に対するおもてなしの意味でのジオツアー。それを高校1年生が、4月から10月の本番に向けて、半年間かけて中身を練り込んだものになっている。8月末にイベントみたいなものがあり、私も一般客として参加してきたが非常に面白くて、旅行会社にジオパークを扱ったツーリズム等をもう少し商品化してみませんか？ということをお伝えしたりした。蔵王高校の校長先生、教頭先生、学年担当の地学の先生たちも非常に前向き。是非これを学校として個性にしたい。今日もしかしたらプレゼンの際に言うかもしれないが、それで蔵王高校の入学者がとでも増えたらいい。それがきっかけかどうかは分からないが、今年の入学者数は去年の倍くらいまでになっているということで、地域の個性を活かした教育をしているということが上手く軌道に乗っているとするのならば、それをもっともっとジオパークを関連付けた活動に発展させてほしい。蔵王高校はそういうポテンシャルを持っているし、先生もやる気があるのでそういったところは高く評価したい。

ちなみに担当の地学の先生は、ジオパークというものは、いわゆるジオロジーやサイエンス的な認識ではいるが、それだけではないという事を直接お話ししたことがあった。まだまだ蔵王高校に関するポテンシャルは高い。逆に言うと、そこに入ってくる小中学生でどういう事をやっているのかが全く見えない。そこはこれから何とかかなと思う。

委員長：その他がなければ確認をしたいと思う。45分から15分プレゼン、15分質疑を行う。その後ここに戻ってきて、新規地域に審査に行くかの審議、山陰海岸のイエローカードを受けた後の対応やこの委員会で

どうサポートするかについても意見交換したいと思う。

その他、コメントや追加する議論等があればお願いしたい。

事務局：報告事項でお伝えするのを忘れていたが、メーリングリストでお知らせしたように JGC 主催のオンライン研修会を開催する。基本的な基礎研修な位置付けの研修なので、どうしても昨年と一昨年と重複する内容になってしまうと思う。皆さんにも振り返りながら、できれば参加していただきたいし、JGN のほうではこの春からジオパーク担当になった行政職員等もすでに結構な数の方の申し込みをいただいている。環境省もお声がけいただいたので、各地のレンジャーの方など今回たくさんの方が申し込みをいただいているところ。

【日本ジオパーク新規認定申請プレゼンテーション】

1. 蔵王

(発表 15 分、質疑応答 15 分、計 30 分)

【④ 新規認定申請地域現地調査の可否】

委員長：それでは二部を始める。

まず、新規申請地域の現地調査に行くかどうかの判断をするが、すでに行くつもりで質問をしていた。行くことでよろしいか。何かポイントや、こういう所を見てきたほうがいい等、不安や感想があればお願いしたい。

委員：申請書に防災について結構書かれていたが、プレゼンの最初の映像で、火口のお釜の所まで近づける火山とあった。火口に近づける火山はそんなにないと思う。もしそこで噴火があったらどうするのか。最初のトップページの写真を見て感じた。

委員長：当分噴火しないような気はするが、最近地震が多発している。

委員：阿蘇や桜島もそうだが、色んな所のジオパークは活火山との関係性もあって、それは防災の中で上手く誘導路をちゃんと確保することが明記されているので、そういう対策をちゃんと組み込まれていけばいいかなと私は思う。

委員：そういう事を考えてプレゼンしてほしい。申請書には防災については結構書かれているが、いざあの映像を見せて何も感じないのかというのが私の率直な疑問。

委員長：その他はあるか。

委員：蔵王火山と青麻山の恐山まで続く脊梁の火山 2 列があって、それが特徴という話をしていたが、それはもしかしたらユニークかもしれないが、何がどう違って、どういう学術的な意味があるのか、それに対する国際研究等はどの程度あるのか、どういう国際評価があるのか等、そういう話はあまりなかった気がする。

委員：総じて、今日は表面的な説明しかされていなくて、青麻山にしても特色があるのであれば、露頭とかを出してくれればいいのだが、申請書には「遠くから見たら綺麗に見える」や、「風景が良い」等の表現が多い。ジオパークなのでジオサイトの詳しい説明があってもよかったのではないかなと思う。

委員：マグマの性質など平たい言葉で言い換えてもらっても良いとは思いますが、やはりジオパークなので学術的に踏み込んだところまで行ってほしいと思う。例えば、ジオサイトの案内板にそういうところには学術的な情報を入れてもらわないと、多少専門的な知識がある人が訪れて「ほとんど観光ではないか」という印象を持ったらあまりよくないと思う。是非、現地に行く際にはそういうところに目を向けていただけたらと思う。

委員長：委員のおっしゃる通り確かにそれが説明できていない。

教育のところは、蔵王高校をととても宣伝していた。もっと質問をしたかったが時間がなかった。

その他はあるか。

委員：樹氷の木の衰退は激しいのか。

委員長：アオモリトドマツのことか。ここからは理解を深めるために副委員長にも議論に加わってもらうことにする。

副委員長：とても問題になっている。

委員長：この課題のために検討会ができていたと思ったが。

副委員長：衰退の兆候が見られた時点で、何年も前から山形県や山形大学の農学部の方が入って調査をしているはず。

委員：斜面の方向から言うと、全方位にアオモリトドマツはあるのか。

副委員長：山形側にもある。どちらかというところ、樹氷で売っているのは山形側。山形県が観光的には売っているが、宮城県側でもいくつか樹氷のあるポイントがあるので、最近は宮城県側も冬の観光でつかいだしている。

委員：山形県側のほうが有名なのか。

副委員長：はい。

委員長：それでも蔵王と言うのか。

副委員長：そうですね。

委員長：蔵王というと全域を指す。

委員：道路の通っているところが山形県側だと思った。

副委員長：実際は山頂直下の所の道路沿いのアオモリトドマツは白化しており、枯れがとても目立っている。その現象はその道路沿いでよく見られる。

委員：オーバーツーリズムとは関係があるのか。

委員長：気候の変化や人的な要因など、様々な原因はあると思う。

事務局：先程話題になっていた名称の件も、今後の検討事項になるのか。

委員長：今後どう展開していくかによる。

委員：順に色々と考えたときに、当初は山形県と宮城県があったので「蔵王ジオパーク」で全然問題はなかったが、現在は宮城県だけになる。厳密に言うと「宮城蔵王ジオパーク」ではないかと思う。なので、これまでのいきさつを考えてこのままでいいのか、今日は質問しなかったが、このことについて山形県側はどう考えているのか確認したい。おそらく五島列島と同じで、例えば「宮城エリア」と入れるのか等、その辺をどうするのかがある。

委員長：浅間山も「北麓」とついているし、栗駒も「山麓」とついている。

副委員長：一般論になるが、観光的に「蔵王」と言うと、山形県の人たちが「蔵王」という名称を使っていて、蔵王観光のプロモーションを盛んに行っている。そのため、一般の観光客には「蔵王」は山形県の蔵王と認識されている。一方で宮城県側ではかつて「表（おもて）蔵王」と言ってみたり、宮城県も蔵王だと山を挟んで競争意識のようなものも少しあった。それを現在では「環蔵王」として、防災上もあるし、みんなで協力しあいながら蔵王を盛り上げようということになっている。だが、やはり山形県側の観光業者が言うと、蔵王は山形というところがあるので、今ご指摘があった名称についてはやはり宮城県と山形県両県で環蔵王的になってくれば「蔵王」と名乗っていいと思う。「(宮城エリア)」などをつけるのもありかもしれない。

委員：蔵王駅が山形県側にある。

副委員長：そう。宮城県側には白石蔵王駅がある。

委員：私は仙台に住んでいたが、蔵王と言うと宮城県にもあるけど山形県中心というイメージがまだ残ってい

るし、蔵王の温泉は川崎町だったり等、蔵王というイメージが漠然としている。

委員：そういう意味では皆さんは蔵王というのをつかっている。

委員：リゾートの名前を見るとみやぎ蔵王えぼしリゾートなど宮城を強調している。

副委員長：宮城側にも蔵王があるという主張。

委員：昔はよく宮城蔵王と言っていた。

委員長：よく分かった。山形側の了解を得たとは言っていたが、「蔵王」の名称を使うことなど、その辺を含めて確認する。

委員：領域についてだが、そもそも県境が未確定のエリアをどう判断されているか。

委員長：持続的に管理できるかどうか。県の施設しか使わずに県がちゃんと協議会のメンバーに入っているということが分かればそこを含めることは可能だと思う。駐車場もそうなのか。

副委員長：駐車場は県かもしれない。県立公園なので。

委員長：県立公園の近くは境界線が走っていないのか。

副委員長：ちょっと分からない。

委員長：それも含めて確認してきたいと思う。

委員：県と町の境が問題かなと思う。お隣のセヶ宿町はノータッチなのか。

委員長：セヶ宿町の境界ははっきりしているのか。

委員：していない。濁川の最上流で境界が終わる。

副委員長：川崎町のほう。

委員：川崎町は入っているのではなかったか。

委員：協議会には入っている。

委員長：川崎町の一部を北側に入れたと紹介していた。それもカルデラの壁で境界を引いてしまったので入れた。

これくらいで大丈夫か。それでは次の議題に移る。

【⑤ 山陰海岸の状況確認と今後の対応について】

委員長：事務局のほうからこの件に関して経緯を説明していただきたい。

事務局：事前にメールで参考資料を4点送付している。朝の報告事項の中で委員長からご報告いただいたように、先週ユネスコのwebサイトでユネスコ世界ジオパーク・カウンシルのレポートが公開された。それを受けて山陰海岸ジオパーク推進協議会から「レポートが公開されているので記者発表を行います」というプレスリリースが5月11日にされた。5月12日の午前10時30分から12時まで1時間30分にわたって記者発表を行った。4点送付した参考資料のうち一つは新聞記事。新聞記事は記者会見を待たずに最初のリリースで記事になったもの。この後、委員長が行かれていますので5月16日の朝刊を含むものをいただいている。これら4点全て山陰海岸の事務局から送付されたものをそのまま資料に使っている。

最初のリリース時には英語の報告書を抜粋というものと会長コメントを付けてリリースされている。翌日、日本語版を間に合わせた。山陰海岸で訳されたものは、部分的に馴染みのない単語、訳し方をしているように思うところもあるが、そのままいただいたものを今日参考資料にしている。

もう一つ資料として、これも山陰海岸のほうでまとめた記者説明会の議事概要を付けている。経緯としては以上となる。

委員長が現地に行かれていますのでご報告をいただけると思うが、本日事務局のほうから今後の対応について提案したい。プログレスレポートの日本語の下書きをいつもならユネスコの審査員が来る前の年の6月頃

には仕上げていったん提出して夏に現地調査に行っていたが、今回は今カOUNシルのレポートが公になったばかりで、山陰海岸のほうでこれから働きかけ等を地域の中でもしていく段階なので、6月に提出して夏に調査というのは現実的に無理だと思う。今だと書くことも限られていると考えて、事務局提案としては、日本ジオパークの再認定審査5地域と時期を合わせてプログレスレポートの下書きを9月15日締め切りにして10月に現地に行っていたとという案で、そしてそこからレポートのリライトも含めて、12月に英語と日本語のまとめたものを提出していただいて、1月末にはユネスコに提出するというスケジュールにしてはどうかというのが一つの提案。

もう一つの提案としては、日本ジオパーク委員会も日本ジオパークネットワークもその他の関係機関もみんな協力してこの課題に取り組むようにというリコメンデーションがでているので、9月10月を待たずにJGCのほうからサポートできることをいくつかやってはどうか。

昨年、一昨年にサポートで入っていた委員2名のレポートの中にも今後ワークショップをして皆さんが話し合う機会を増やすべきではないかという提案をいただいていた。調査にはお一人は同じ委員がまた担当していただくことになっている。もう一人の委員には6月から8月の間にJGCから派遣してワークショップを開催するなどというサポートができないかというのが事務局の提案。

委員長：現地で開催するということでよいか。

事務局：現地でやる。それは、ワークショップを1回やればいいのではなく、その後に県立大の研究者等にも入ってもらいファシリテーションをできるような、1回行ってその後広く展開できるような支援をという構想で案を考えている。

委員長：記者発表をした翌日の5月13日と14日に現地へ行った。玄武洞が最初のIUGS地質遺産サイト100選に選ばれたので、その祝賀イベントに行った。そこでIUGSの認定証をお渡しし、記念講演をした。その後、市長（協議会会長）と意見交換し、さらに、玄武洞ミュージアムへ行き、館長やミュージアムショップの社長と意見交換をした。

玄武洞は審査が終わった段階から何も進んでいないという状態。ミュージアムへ行くと、ミュージアムと連結したミュージアムショップがあって、そのショップの1/3程のスペースで化石・鉱物を販売している。山陰海岸には直接関係のない物を販売している。

カOUNシルの報告というのは、ミュージアムショップに対して指摘したのではなく、協議会に対して指摘をしている。その辺がちゃんと理解されないまま記事になってしまったところが問題。私の講演の中でもなぜジオパークが鉱物・化石の売買に加担しないかの理念を説明した。そういう理念をミュージアムの館長に説明してもあまり理解いただけなかった。

ミュージアムには、非常に狭いがジオパークコーナーがあって、そこで山陰海岸ジオパークの岩石や見どころを宣伝している。肝心の玄武洞の磁場の逆転については、非常にしっかりとした説明と展示がある。入館料は800円。会長は、ユネスコは、石を大事にすることを伝えなければならないのではないかという個人的な意見を言っていた。

事務局：少しだけ追加させていただく。

記者会見をしますというリリースは確かに協議会会長コメントと英語のカOUNシルレポートの抜粋だけを付けて送って、それが次の日にもう報道で出てしまった。そこには何も但し書きはなかったが、記者説明会をした時には最初と最後に、「このリコメンデーションはジオパークの運営団体である協議会へのものであり、一民間の事業者に対するものではないので、そこに突然取材へ行ったり迷惑をかけること等はしないでほしい」というお願いは強調されたと事務局からは報告を受けている。この議事概要の中でも最初にこのことが書かれている。

また、明日も山陰海岸のイエローカードの問題を意識してパブリックセッションをやっていただくことになった。JGC の皆様にも研修として位置付けて参加していただく予定だが、そこにも山陰海岸の県から派遣されている新しい事務局長や、担当の事務局員が参加をする予定。

委員長：まず、報告事項等について質問があればお願いします。特にカウンスルの報告や事務局も言ったが、現地だけではなくて、日本ジオパークネットワークと本委員会が一緒になって解決してくれという方向である。委員会として何ができるかということも含めてご意見をいただければと思う。

委員：私は現在の社長は知らないが、前の会長とは昔からコミュニケーションをとっていた。あの方が山陰海岸ジオパークをやりたいと言い出した一人。いざ申請を出す段階になって、鉱物販売をしていることが認められないとなった。当時の基準としては、まずジオパークの運営組織が鉱物販売に関わらないこと、それからジオサイトの中で売らないことだったので、あれはジオサイトとは別だという形で申請をして通った。申請書に鉱物販売があるとは書いていなかった。その後、会長は納得がいかないでユネスコに鉱物を売ることは意義があるということをしちんと訴えてくれというのを私に何度もコミュニケーションを取ってきた。ギー・マルティーニさんの話をある程度聞いていたので、もともとジオパークというのは鉱物・化石の採取をしないでどうやって地域が潤うかという事から始まっているので、これからそれがひっくり返ることは絶対にないという事は前会長にも申し上げてきたので、数年間に渡りそのやり取りをしていた状況。そういう事があったということも補足する。

事務局：その連絡は初期の頃だけなのか。

委員：そう。2012年か2013年くらいだったと思う。

委員長：ここにきてカウンスルが何で今頃、鉱物・化石販売をやめろと言い出してきたかということ、これまでの審査の時にはそこに審査員の足が向かない様に工夫していた。ところが数年前、ミュージアムショップがリニューアルをしてレストランを持つ、とてもおしゃれなミュージアムに変わった。しかも玄武洞に行く途中の駐車場の手前にある。玄武洞からは目の先で、玄武洞に来た人はほとんどの人が立ち寄る。そこには小物がたくさん売っており、その中に小さな鉱物化石が含まれる。また、3~4台くらい鉱物化石のガチャガチャがある。これはジオパークのブランドを使って宣伝しているわけではないが、このジオパークの一番見所であるサイトの目の前で営業しており、しかもジオパークが紹介している地図上にも表示されていた。そういう背景があり、カウンスル会議で何とかしなくてはいけないということになった。

事務局：それに関連してだが、記者説明会の議事録を読むと、カウンスルが急に厳しくなったような説明をしているが、かなり誤解されているところもあると思う。というのも、事実としては、今までは鉱物を販売しているという事は公式には伝わっていなかった。現在のミュージアムショップは目立っているし、リニューアルしているし、英語のサイトもあるので、これをいつまでも伝えずにいるのはおかしいということで JGC の助言もあって、提出したレポートにも販売行為があるけれども運営団体が販売しているものではないし、売らないように働きかけをしていると記載していた。それをもとに今回審議をされて、プログレスレポートと現地審査に行った審査員の現地審査報告書（ミッションレポート）に加え、ネット検索等をして分かる範囲の情報も収集しカウンスル中で共有された上で議論された。英語のサイトでも情報発信をされていて、ジオパークのツアーのランチがこのミュージアムの中で設定されていることや、ミュージアムの web サイトに重要なジオパークのサイトの玄武洞がすぐ近くにあることなどが全部英語の情報で見られる状態でかつ販売が行われているということで審議があった。

委員長：調査員の配置表で確認しておきたいのだが、山陰海岸は 2024 年に再認定審査の予定があるので、今回は事前の確認調査という事になる。2022 年にユネスコから条件付き再認定には、今の鉱物販売の問題と他にもいくつかあって、何を一番メインに確認をしたらよいか。

事務局：実は山陰海岸の事務局からも今日の会議で確認してほしいと言われていたのに関連する。今回リコメンデーションが4点あり、販売だけの問題だけではないが、山陰海岸はエリアが広いので次の年の審査の準備ということで確認をすると、今まではかなり色々を見せていただいているが、今回はこのリコメンデーションを中心に確認を集中していただくことはできないかという質問を受けている。

ただ、販売があったからダメだという捉え方に聞こえるが、そもそも2番のリコメンデーションの運営体制についてとても重く受け止めるべきだと思う。運営体制に関しては、豊岡市にある事務局のことだけを見てもダメなので、豊岡にだけ行くというミッションは成り立たない。もちろん改善すべき点としてあげられている課題については確実に進捗状況を確認してきていただく必要がある。実際に2024年に審査員が来る時には、今までにきたことがない2人が海外からいらっしゃるので、そのためにも確実に見ておかなければならない基本情報というのも全部パスするわけにはいかないと考えている。それは委員会の皆さんのご意見を今日伺いたいと思っている。

副委員長：承知した。

委員長：現地は、鉱物販売だけでイエローを出されたと思っている感が強い。事務局の体制自身が非常に弱いという問題がある。

具体的に誰が現地にサポートに行ったらよいか。

委員：とても根深い。受け止められていない状態なのと、協議会がうまく機能していない。

行政主導の状態から協議会をうまく機能させて、そこに大学の先生方もたくさん入っているので、そういう方々が意見を出して通りやすくなるような体制にすべきなのかなと思う。これが体制の問題。

あともう一つは、委員長が説明されたと言っていた「なぜダメなのか」という背景が新聞記事に全く出ていない。そうすると、正当な商行為への妨害ではないかというところを言われやすくなると思う。背景の部分をどういうふうに浸透させていくのかというのが重要なのかなと思う。

以上2点が前進させていかなければならないところかと思う。

委員長：その通り。非常に重要なポイントだと思う。事務局だけが対応しているところがあって、協議会がとにかく出てきていない。

非常に主要な指摘をいただき感謝する。1回ワークショップをやればよいというものではない。

事務局：先程1回という提案をしたが、どの委員も皆さん順番に行くくらいのサポートが必要なかもしれない。

委員：そのワークショップの対象はどこまでの範囲になるのか。

事務局：それも含めて今から決める。ご提案をいただけたらと思う。

委員：リコメンデーションの2で、英語だと「*Consider strengthening the independence of the UGGp management*」になっているがこれはどういう意味なのか。協議会がしっかり独立的にやれということの意味しているのか。

事務局：この背景を説明する。現地調査に来た方々が山陰海岸の後に阿蘇へ行った。阿蘇に行ったら阿蘇がJGCからのサポートもリコメンデーションもあって、事務局体制を改革した直後に行って見ているので、しっかり機能するようになってきているという実感でミッションレポートに改善を認めるような言葉が並んでいる。なので、それを参考にするのもいいのではないかとということで、ミッションに来た方は「阿蘇を参考に」と実際に書いていたと思う。ただ、neighboringなので隠岐など外から見たら日本の他の地域も全部参考になるものは見てというくらいに受け止めたほうがいいのではないかと読み取れる。

委員：承知した。

委員：私がこれを読んで思ったのが、隠岐みたいに完全に独立化して一般社団法人になればいいのではないかと

と思った。

事務局：そこまでの事はミッションレポートには書かれていなかった。

やはり、協議会として機能していないので、機能するように組織改革をというのが言いたいことだと思う。

副委員長：3府県6市町をまとめるのは難しい問題。

委員：まず、どこか機能している所の例を教えてあげないと、協議会として機能するということがどういう事かが分からない。イメージがわからない。

委員：玄武洞ミュージアムは改修する時に豊岡市がある程度の補助を出していたのではなかったか。鉱物販売をそこで調整すればよかった。

委員：質問だが、糸魚川の翡翠は解決したのか。参考にはならないのか。

事務局：参考にはすべきだと思う。解決をしたのかと言うと、まだ色々やっている。

委員：ユネスコ的にはOKなのか。

事務局：前回の委員会でも話題にはなっているが、最初から隠していない。今のガイドラインの基準の7番に例外についても書かれているが、こういう範囲で売りたいと、その例外に当たるような申し出を、その当時は世界ジオパークネットワークが審査をしていたが、そこにちゃんと願い出て、認められて一部を売っている状態。その経緯をしっかりとプログレスレポートにも書いて、今こうなっているということで報告している。

ただ、業者が輸入していたり等、色んな問題がまだまだ続いているが、ずっとその問題に取り組んでいるので参考にすべきだと思う。

委員長：問題はあるけど、一応ユネスコ的にはクリアした手続きをとっている。特に、伝統文化をどう維持するかというところ。でも、今回は伝統も全く関係ない。

委員：糸魚川は、少なくともそれなりの歴史がある地場産業なので、まだ許されるところがある。山陰海岸では一つの博物館がどこかから買って来た物をそのまま売っているの、認められる可能性は低い。

副委員長：ワークショップに関してだが、テーマの持ち方だと思う。単に啓蒙的なものをやるとあまり響かないと思うし、今地元では大変多くの新聞報道をされていて問題視されているところは認識されているので、認識のズレをどうやって解消していくかというところと、山陰海岸ジオパークにとっては、来年度またユネスコの審査がある、イエローだというそこら辺の情報をみんなで共有しながら、どうやったらそれを乗り越えられるかという気持ちをみんなが持っていかないといけない。例えば、事前確認の調査に行った時に誰かがまた色んな意見を言い出して、そこでまたヒートアップしてしまってそれがその先の審査にあまりいい影響をもたらさないということもあるので、ここは少し戦略的にやらなければならない。わいわい言っている人達やメディアとかそこら辺にきちっとした情報、特にメディアがミスリードしないような形での説明をしっかりとしていけないと混乱してしまう感じがする。そこをきちっとやることと、なぜ鉱物販売がいけないのかというそもそものところは日本の事例だけではなく、世界のグローバルな意識に立った中でジオパークの役割があるんだというところのその役割に山陰海岸がしっかりと組み込まれるべきだということをもっとグローバルな立場から言ってもらえる人、例えばオンラインで世界ジオパークネットワークから誰か話していただくなど、そういうような形でメディアを呼んでしっかりと誤解を解いていく作業も必要かなと思った。

事務局：カウンシルのミーティングが終わった直後に、世界ジオパークネットワークの会長から「いつでも言って」と言われている。というのが、その方はレスボスのジオパークの代表の方でもあるが、レスボスと山陰海岸は姉妹提携しており、いつもプレゼンテーションでコウノトリのストーリーや良い話を紹介してくださっている。世界のほうからもここでグッドプラクティスを出してほしいというように期待されてカウンシ

ルの議論は終わっている。

副委員長：やはり JGC・JGN だけではなく世界ジオパーク全体が問題意識を持って、グローバルなところで仲間が問題意識を持ってここを見つめていますよという建付けでやっていったほうがいいと思う。みんなが山陰海岸を大事にしていると。

事務局：その第 1 弾として、明日のプレゼンテーションで世界の方から動画でメッセージを投げかけていただいているのでそのアプローチも良いと思う。

具体的にはどうするのがよいか。行くのがいいのか、来てもらうのがいいか、それとも両方で色々働きかけるのがいいか。

副委員長：来てもらうというのはどういうことか。

事務局：例えば、JGC で東京で何かを開催する、あるいは現地に関係者がいるので現地で何かを開催する。

副委員長：できることはやってもいいと思う。一番誤解されそうなところに向けてしっかりと情報発信をしていくということだと思う。もちろん東京でしていただいてもいいと思う。

委員長：ただ、外堀を固めたから売らなくなるというのは難しい。

副委員長：そうすると、例えば来年の再認定までに鉱物を売らなくなる道筋ができないとレッドになる感じが。

委員長：売らないようにする理念を理解してもらうような努力を一生懸命ネットワークも JGC も一緒にやっていることが積極的に見えればいいかもしれない。

副委員長：解決にまで至らなくても、その途上としてみんなが一緒に同じ課題を共有して動いているということを出発点としてイエローになった後と、プラス運営体制等色々あるのでそれもやらなければならない。

委員長：玄武洞のガイドの人にもユネスコの理念がちゃんと言えらるかどうかが。あの店で買うなどは言えないが、ユネスコとしてはこういう理念だということを常にどこかで言ってもらえるようになるかどうか。

委員：新聞記事について気になったのが、カウンスルの 1 人がグリーンを出している。その方の考えはどこかにあるのか。

委員長：それはガイドラインにちゃんと沿っているからいいのではないかという判断だと思う。要するに、運営団体、協議会が売っているわけではなく、メンバーやパートナーではない人が売っているのはいいのではないかということ。

委員：承知した。

委員：その概念は通じないということか。

委員長：それを分かっている今回イエローにしている。

委員：問題視されているのが、グリーンを出した方が直接参加していないのでいいのではないかということだったが、結局他の人達が玄武洞の web サイトで明らかにジオパークの施設やジオパークのサイトが掲載されているし、ジオパークが出版しているマップ等にも入っているし、ジオパーク発信の中でもその場所が重要視されている。このミュージアムの web サイトの中でもジオパークの情報が入っているから、そもそもそこをなくさないでグリーンとは言えないと感じる。

委員：今回難しいのは、場所の問題なのか行為の問題なのかがあって、例えば玄武洞のミュージアムの中で売っているからダメだからそこを何とかしなさいとなっている場合、玄武洞で販売をやめて豊岡の商店街に持って行って販売したらクリアなのかという問題がある。

事務局：クリアではない。

委員長：実際はそうしている。

委員：それはガイドラインに反していない。

事務局：ガイドラインにも「だったらいい」とは書いていないので、今回ここまできて「そうした」という報告をしたらダメだと思う。認められない。

先程のグリーンの話で、カウンスルで、ガイドラインには反してはいないのではないかという意見が出た時に、直接管理運営団体が販売をしていたらレッドカードになるという話にもなった。どうしようもなかったら、先程委員がおっしゃった色々関係性があるように見えているところをきっちり整理するやり方もあるけれども、見た限り素晴らしい施設なので、ここはきっちり話し合っ、しっかりと理解、納得した上で双方にメリットがあるように販売をなくしていくように働きかけるべきだ、グッドプラクティスを出してほしいというところで終わっている。まずはいきなり関係を断ち切るのではなく、なぜ販売をやめるようにユネスコ世界ジオパークでは働きかけるようにしているのかという背景をしっかりと関係者や販売している業者を含めて理解していただくように働きかける等、そのプロセス抜きに突然小手先で「やめました」「関係をなくしました」というのでは不十分だと思う。

委員：新聞報道は、正しいことを短い記事の中で伝えるのがとても難しい。今回の報道はかなり偏っている。誤解を助長するような方向になる内容。グッドプラクティスを作るにしても、どういう方法があるのか分からないが、マスコミ対策みたいなものがないと一般の人は、新聞を読んだとかテレビを見たということになると思う。

事務局：おっしゃる通り短くしなければならない中で、どう誤解を招かない様に影響力のある記者に正しく書いてもらうのはすごく大事だと思う。

副委員長：会長の言葉で「石を大事にする」というのがあった。これはみんなが受け入れられる言葉だと思うが、例えばワークショップでもなぜ鉱物販売がいけないのか、石を大事にするというのはジオパーク的にはどういう事なのかという発信ツールを地元の人たちと一緒に作るのはいかがでしょうか。山陰海岸ジオパークで「石は大事」というタイトルで、例えば、鉱物の販売がなぜダメなのかを動画でもいいしツールでもいいが、それをミュージアムでも扱ってもらうとか、ミュージアムショップの会長や社長も一緒に、会長の「石を大事にする」という言葉を山陰海岸で大事にしながら、どうして鉱物販売を変えていけばいいかというのをみんなでやるのでメディアに対しても使えるようなツールをみんなで作りましょうと、JGC だけが誤解を解く活動をするのではなく、地元のステークホルダーも含めて「石を大事にする」をテーマで何かできないかという事をやって、成果物を1個出して来年調査員が来た時にそれを見てもらう。これができるまでにこんな活動をしました等、石の販売は解決できないかもしれないけど「石は大事」という認識をみんなが持つ活動を始めましたというところを見せたらどうか。

事務局：ただ、「石は大事」だから自分の手に持って買って大事にするのがいいという主張なので、その間のところを大事だから個別に買って持って帰るのではなく、別の大事にする方法を考えなければならない。

副委員長：承知した。

ではミュージアムかショップに「石は大事」、持ち帰る代わりに石の保管場所、自分の My 保管場所を作ってもらえるのはいかがでしょうか。石を買ったらそのミュージアムの中に小さなロッカーがあって、自分の名前と住所があって、もう一回そこに行けば自分の買った石を手にとれる。

委員長：私も似たような提案をした。博物館で図書館みたいな仕掛けはできないかと提案はしたが、「できるわけがない」と言われた。

委員：これを聞いて私も思い出したが、ポーランドのジオパークはこのような事をやっている。

委員：あそこでは鍾乳洞で石の標本を売っていたのと、あともう一カ所、ジオサイトから駐車場の間の出店で売っているのを指摘して認定保留になった例がある。

委員：昔、採石中の場所のところで、子供向けの石だが好きな石を拾ってミュージアムに持ち帰って観察した

後で、みんなが今日採取したものをロッカーに入れる。そして持ち帰らない。

委員：それは回収したものではなく買ったものなのか。

委員：買ったもの。それは大きな違い。

副委員長：方法は色々あると思うが、冒頭の「石は大事」のところだけをフューチャーして山陰海岸でやってほしい。この課題から新しい活動や動きを作って、グローバルな形で皆に伝えられるとよい。ポーランドでもそのような類の事をやっているのであれば面白いかなと思う。でないと、みんなが動かないし変わらないような気がする。

委員：今のところはユネスコ対ミュージアムの問題で、それを仲介するのが事務局みたいな感じで、新聞の報道等を見る限り変なふうになまっているような気がする。本当は違うのに。

委員長：時間もそろそろ迫ってきているが、ワークショップ等で現地を中心に協議会メンバー、メディア等に対してもワークショップ等を数回開くということをやらざるを得ない。その具体的などころをどう詰めるか。

事務局：プログレスレポートの締切りの提案が9月15日でよいかということ、現地の確認を通常であれば夏だが、秋にずらすというのは承認していただけるか。また、そのように進めてよろしいか。

委員長：要するに確認調査を後にまわすということか。

事務局：はい。今だと内容を書けるような活動がまだない。

委員長：9月15日までに我々も何かアクションを起こしていないといけないということか。

事務局：はい。

委員長：最低1回はやらないといけない。菅原委員のワークショップを1回、メディアのワークショップを1回、少なくとも2回はやりましょう。

事務局：オンラインも含めて、色々働きかけて整理していこうと思う。

委員長：最後は事務局と私と行ける人で調整をする。行きたい人は積極的に手を挙げていただきたい。

事務局：明日のパブリックセッションが12時15分までだが、終了後に山陰海岸と今後の進め方等について相談したいということで事務局とアポを取っている。もしそこに同席できる方がいればお願いする。

委員：ちなみにミュージアム側の信頼があるジオパークの担当者はいるのか。敵ばかりになるので精神的の事を考えるとせめてというところがある。そこの気持ちを分かりながら進めていけるような人がいればいい。

委員長：事務局はミュージアムとショップを含めて定期的に会合を持ちたいと5月14日のミュージアムとの面談の折に言っていたので、その時に誰か委員を呼んでもらうのはどうか。なので、定期的会合と2つのワークショップの3つを9月15日までにやる。

事務局：それと明日見ていただくが、セッションで使われるギー・マルティーニさんの動画というのはワークショップの導入でも今後活用できそうなので0からのスタートではない。

副委員長：2回目は、現地調査に行った時に2回目をやるのか。

委員長：報告書が出た後になってしまう。

事務局：その後に提出する1月の報告書には追加で書ける。

委員：協議会の会員向けのものも何かしなければならぬのではないか。

副委員長：JGCでも色んな分野の方がいるので、色んな分野から山陰海岸を見てもらいながら皆さんの少しずつのお力をいただいたほうがいいと思う。

事務局：今回の報道発表の中で、JGCからはそんなに厳しく言われてなかったというのを強調されていた。確かにオンラインで調査された後は、ミュージアムに行く前だったので通知書には出ていなかった。現地に行かれた後は、委員お二人も重く受け止めてしっかりとアドバイスをされている。だからこそプログレスレポートに書いたというような流れだったという認識でいるが、そこが理解されていなかったというのを今回の

発表で思った。

そのあたり何かあればコメントをお願いしたい。

委員：8月のオンライン調査ではこの玄武洞ミュージアムの話がまるで出ていなかったの、そういう実態があるというのを知らない状態でレポートを書いて提出をしたという状況。ただ、ミュージアムのリニューアルをして観光地としてお客さんがいっぱい来る所で、誰もぱっと見て分かるような状況で石を売られているというのが情報で分かったので、これは絶対現地を見ないといけないと思った。そのために11月に現地を見させてもらって、そこで館長と学芸員の方と会って、お話をした。文科省の方にも見ていただいて、なんでそういった事を今まできちんと議論の場にあげてこなかったのかと。どうしても隠しているようにしか捉えられない。これを機に顕在化させて、みんなで課題解決していかないと難しい。

その段階でこれをどうやって解決の方向に仕向けていくか、一年で解決できるかと言うと絶対不可能なので、そうやってその意識を変えていくような機会を作れるかという事を考えてワークショップの開催や情報を広げていく等、様々な人から話を聞いていく機会を作りましょうという提案をしたのが背景。

事務局：アドバイスも指摘もしているのに重く受け止めていなかったのかというのが今回の問題だと思う。

委員長：しかも指摘されていることが分かっていたのに、正式リリースされるまで何もしなかったのが問題。

委員：アドバイスに関して、ミュージアムとの打ち合わせ等で記録を残すのをお願いしているのにも関わらず、その後も記録を残していないという対応。問題に対して取り組む意識を確認する必要がある。

また、懸念として伝えられたことに対して、問題ないという意識であったことがひっかかる。そういう形では現地には伝えてはいない。記者会見での「何でイエローなのか分からない」というような発言は、「いや、分かっていたよね」となる。メディア向けのトークなのかなという気はするが。

あと、読売新聞の始めの質問が「鉱石が販売してはならないという方針であるのに、宝石類を売っているエリアがあるのに引っかけられないのはなぜだ」という指摘は、将来的にジオパークが直面する問題だと思う。貴金属類はどうするのか、金（きん）はどうするのかなど、そういうところは委員会でも意見交換をしなければいいのかなと思う。

委員長：明日の山陰海岸との打ち合わせに参加の委員はよろしく。具体的などころまで詰めることができればと思う。

それでは以上で終了する。

【情報公開共有】

【閉会】